

『孤独のグルメ』私論

— 〈彷徨〉する 〈空虚〉 —

柴 市 郎

『孤独のグルメ』（原題「孤高のグルメ」、原作 久住昌之、作画 谷口ジロー）は、扶桑社刊『月刊PANJ A』（一九九四年八月号～一九九六年四月号）に断続的に発表され、一九九七年一〇月単行本化、さらに二〇〇〇年二月には、文庫（扶桑社文庫）化された。

本稿では、このテキストにおいて、時に過剰なまでの量の摂取として描かれる〈食べる〉ことが、単に食欲に還元される主題ではないことを論じる。また、〈食べる〉ことを〈図〉として浮び上らせている都市空間の様態について、これもまた繰り返し描かれている〈彷徨〉という主題を視野に入れて論及しておく。なお、紙数の関係もあり、漫画としての表現論的指摘は論旨に関わる範囲で最小限度にとどめてある。

※

自身の輸入雑貨貿易商、井之頭五郎は仕事の行く先々で空腹を抱え、街を彷徨し、行き当たりばつたりで飲食店に入り、独りで食事をとる。—というのが『孤独のグルメ』の基調をなすプロットである。

彼が食べているものを、このテキストを構成する一八話のタイトルから瞥見してみよう。「第一話 東京都台東区のおた肉いためライス」、「第二話 東京都武蔵野市吉祥寺の廻転寿司」、「第三話 東京都台東区浅草の豆かんと」、「第四話 東京都北区赤羽の鰻丼」、「第五話 群馬県高崎市の焼きまんじゅう」、「第六話 東京発新幹線ひかり五五号のシューマイ」、「第七話 大阪府大阪市北区

中津のたこ焼き」、「第八話 京浜工業地帯を経て川崎セメント通りの焼き肉」、「第九話 神奈川県藤沢市江ノ島の江ノ島井」、「第一〇話 東京都杉並区西荻窪のおまかせ定食」、「第一一話 東京都練馬区石神井公園のカレー井とおでん」、「第一二話 東京都板橋区大山町のハンバーグ・ランチ」、「第一三話 東京都渋谷区神宮球場のウインナー・カレー」、「第一四話 東京都中央区銀座のハヤシライス(の消滅)とビーフステーキ」、「第一五話 東京都内某所の深夜のコンビニ・フーズ」、「第一六話 東京都豊島区池袋のデパート屋上のさぬきうどん」、「第一七話 東京都千代田区秋葉原のカツサンド」、「第一八話 東京都渋谷区百軒店の大盛り焼きそばと餃子」。

このテキストの未読者には、以上の見出しが、タイトルに掲げられた「グルメ」ということばのイメージとおよそ似つかわしくないと感じる向きも多いだろう。「グルメ」という概念を、一般的に食通、美食家とみなすならば、主人公井之頭の食行動を「グルメ」と表するには無理がある。井之頭にとって、「食」の価値を決める要素は、ガイドブックなどによってもたらされる〈情報〉ではない。食事にかかる費用やその希少性などの消費社会における価値体系は彼の味覚には殆ど影響しない。また、彼は、『恨ミシユラン』(西原理恵子・神足裕司)がそうであったように、ことさらに「グルメブーム」なる

ものに半ば距離を置きつつ、かつ半ば依存しつつ、達観を装ってみたり、目くじらを立てたりといった屈折(一)からも遠く隔たっている。

そもそも、彼は「グルメ」なる共同幻想の外側にいるかのようである。『孤独のグルメ』全一八話を通じ、いわゆる「グルメ」推奨の「有名店」や「高級店」で井之頭が食事することは一度もない。第一四話では、食通として知られた池波正太郎の随筆にも出てくる有名鰻料理店の前を、「…池波正太郎もいいけど…」(今度にしよう…)と、あつさり素通りする井之頭が描かれている。しかし、「食」をめぐって氾濫する〈情報〉に踊らされている人々を冷笑するのではない。

「グルマンディーズは人間関係の大事なきずなのひとつである」(ブリヤールサヴァラン『美味礼賛』(原題「味覚の生理学」)第十一考 食道楽(グルマンディーズ)について)という古典的な定義を参照するならば(二)、井之頭の、人間関係の介入を極力排した食事「『孤独のグルメ』は、一種の撞着語法だとすら言えるかもしれない。このテキストは〈食〉に關し、いかなる蘊蓄をもひけらかすことなく、淡々と食べる井之頭の姿をほとんど何の修辭学的気取りもなく淡々と表現するのみである。彼の食事は行為は、「もぐ もぐ」「むしゃ むしゃ」といったたぐいのありきたりの擬態語とともに表され、奇態な

オノマトペによっていたずらに誇張されることはない。食事する表情、姿は時に、陰影によってアクセントを付けられることはあるが、ことさらにそれを強調する動線は書き添えられないことがない。彼の発する台詞は整った円形の枠線なかに収められ、また、すべての画は几帳面な矩形のコマ割のなかに整然と配置されている。

※

彼にとつて〈食べる〉ことは、極めて素材に空腹から始まる。第一話冒頭に置かれているのは「……とにかく腹が減っていた」という井之頭の内言であり、第二話も、彼が「昼食を食いそこねて 4時半……」、腹は減りすぎている……どうしよう」と街を彷徨するところから始まっており、このパターンが『孤独のグルメ』の基本的話型の一部を形成する。

「食の悦びにとつては、飢えとはいわぬにしてもせめて食欲ぐらひは必要である」（『味覚の生理学』第一四考「食卓の悦びについて」と言いながら、つとにブリヤ・サヴァランは「食の悦び」と「食欲」とを明確に区別していた（3）。食欲（生理的欠乏状態から解放されたい欲動）と、食の楽しみ（諸感覚、記憶、知性を動員し、また他人との関わり〓社会性とも関わる充実感）を、同じ座

標上に位置付けることの不可能を指摘していたのである。ブリヤ・サヴァランはこうも言っていた。「食卓の喜びの場合は、このどちら（飢えと食欲）にも依存しないことが多い」。「食卓の喜び」の向かうところは、「食欲」の充足とは別の地平である。「食欲」の満足度は、「食卓の悦び」と相関性を持たないのだと。

井之頭にとつても、〈食べる〉ことは単に食欲のみに関わることではなさそうである。

「モノを食べる時はね 誰にも邪魔されず 自由で なんといいか 救われてなきやあ ダメなんだ」「独りで静かで 豊かで……」（第一二話）とつぶやく井之頭にとつて〈食べる〉ことが、空腹、単なる生理的な〈欠乏〉状態の解消を意味するものではないことは必然的である。彼の空腹は——、〈欠乏〉は、あたかも彼の中に穿たれた茫漠たる〈空虚〉へと通じているようだ。

ブリヤ・サヴァランにおいて食への〈欲望〉が「食の悦び」と決して一致しないように、井之頭にとつての空腹〓〈欠乏〉と〈空虚〉は別の座標上に位置している。両者の見かけ上の近さは、却つてそれらを隔てている裂罅を印象付けることになる。〈欠乏〉は物理的或は生理的状态に対応し、〈空虚〉は言わば存在論的或は生理的状態であり、前者は言うまでもなく一過的性質のものであり、後者は非・時間的な性質のものである。〈欠乏〉の解消は

量によつてもたらされるが、〈空虚〉を量で充たすことはできない。

したがつて、空腹Ⅱ〈欠乏〉を抱えた井之頭が、〈食べる〉ことに真の「救」Ⅱ〈癒し〉を求めようとしても、それは叶えられない。彼は、現実の食事によつて自らの内なる〈空虚〉を充たすことに失敗し続けざるを得ない。『孤独のグルメ』のエピソードが、しばしば食べ過ぎか（第一、二、四、八、一五話）、もしくは量の少なさ（第三、一〇、一二）に帰着するのも、彼の生理的な〈欠乏〉と内なる〈空虚〉とのあいだに調停しがたいずれがあるからなのだ。

もちろん、これは物語の主人公井之頭の意識外にある問題である。だからこそ彼は量では得られることのない「救」Ⅱ〈癒し〉を求めながらも、しばしば過食を繰り返さなければいけないのである。

バランスのとれたメニューを統辞論的に良く構成された食事とみなすならば、『孤独のグルメ』において反復される過食は、単なる食事量の問題にとどまらず、たとえば、第一話における「ぶた肉いため」と「とん汁」における豚肉の重複、第五話における、深夜のコンビニでの「うずらと牛肉の中華風」、「馬肉入りコンビニーフ」、「玉子焼き」、魚肉ソーセージ、「なめこ汁」、各種おでんという破天荒なおかずの選択に見える肉類と卵類と汁物

類の重複などに見える、いわば食事における範列論的逸脱の過剰を伴っていると言ふことができる。

同じ種類に属する食材、おかずを半ば無意識に選び取つてしまう井之頭の行動から浮かび上がつてくるのは、彼の食事におけるメニュー構成への意識の希薄、異なる種類の食材を組み合わるといふことへの意識の不足であり、言わば食事を構成するうえでの統辞論の欠如である。が、その欠如は先に述べたようにそのまま過剰でもあった。この欠如と背中あわせの過剰さこそ、井之頭の〈空虚〉の底知れぬ深さを示唆してはいないだろうか。井之頭の〈空虚〉は、食において、単に量の過剰のみならず、さらには量を構成する要素の過剰、いわば褻棄された過剰をも呑みこんでしまうのである。

※

ここで、『孤独のグルメ』において、井之頭が〈食べる〉ことで束の間の安息を得ているかに思われる例外的なエピソードを省みることにしよう。

ふと入った「自然食」の店で、井之頭は「おまかせ定食」のほうれん草を食べながら、「うわ…なんだ このホウレン草」「固くて臭くて…まるで 道端の草を食っているようだ」と言いつつ、「マズくない！ けっし

てマズくないぞ!!」「ああ うまい! なんだかなつかしい味だ」「そうか これは子供の頃キライだった味だ」と回想しながら、いつそう旺盛な食欲を掻き立てられてゆく(第一〇話)。また、石神井公園で「カレー丼」を頬張りながら、心の中で「うん! これこれ!」と言い、「:って なにが 『これ』なんだろう:」と自問し、「子供の頃 夏休みに 田舎のおばあちゃんちで 食べたお昼かな」と思い当たって、彼は安らかな午睡に誘われてゆく(第一一話)。また、雑踏から逃れるようにしてやって来たデパートの屋上で「月見おろしうどん」を啜った後、満ち足りたように「そうか:都心のぐしゃぐしゃから 逃れたければ ここに来ればいいんだな」「ここでは青空が おかずだ」と心を解きほぐしてゆく(第一六話)。

彼はこうして〈食べる〉ことを通じてむしろ〈今〉ではない〈いつか〉、〈ここ〉ではない〈どこか〉へと導かれることによつて、一時の慰藉を得ているようである。ここに或る種の〈ノスタルジー〉が存在することは言うまでもない。『孤独のグルメ』は、「白い飯」への憧憬とその不在を描き出す。井之頭は、川崎の焼肉屋で待ちかねたように「早く ご飯こないかなあ」「焼き肉といつたら白い飯だろうが」(第八話)とひとりごと、渋谷の街をさまよい、ようやくたどり着いた餃子専門店では、

メニューにないライスを思い描きながら「ああ白い飯が欲しいなあ」、「ああ:白い飯」(第一八話)と繰り返す。

確かに『孤独のグルメ』は、〈米〉に集約される脱文脈化された〈日本〉的郷愁に粹取られた物語として読まれかねない要素を帯びている。最終話第一八話の井之頭のことばが「俺つつくづく 酒の飲めない日本人だな:」(傍点柴)であり、加えて「あとがきにかえて」(久住昌之)のタイトルが「釜石の石割り桜」(傍点柴)であることも、そうした見方と矛盾するものではないだろう。だが、『孤独のグルメ』の〈ノスタルジー〉はそうした郷愁に回収されてしまうものではない(4)。

既に述べたように『孤独のグルメ』のエピソードは、たびたび街を彷徨う井之頭の姿をその冒頭に描いている(一、二、三、四、七、一〇、一四、一六、一七、一八話)。彼は食事が取れる場所を探しているだけなのだが、「まいったな:いつたい どこに迷いこんでしまったんだ」(第一話)、「何でもいいと思ひながら 入る店の無さとこみあげる空腹感にいらだちを覚える」(第二話)、「過剰だ:この国 いや この街では何もかもが過剰すぎる」(第七話)、「あの店のない銀座かあ:」(第一四話)、「この街には『食欲』というものが欠乏している気がする」(第一七話)、「ここはもう俺のくる場所じゃないな」(第一八話)と、現代都市における方向感覚の喪失

を、そして違和感を繰り返して吐露している。井之頭がふと漏らすこれらのことばは〈批判〉という意識とは別のものながら、記号が過剰にあふれかえり(5)、「実在此そ、われわれにとつて正真正銘のユートピアとなつた」(ジャン・ボードリヤール『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳、政法大学出版局、一九八四、一五七頁)ポストモダン都市の特質を浮かび上げらせる。こうした文脈のなかでは、井之頭の〈彷徨〉はおのずから、周囲の環境を知覚と記憶によつて把握しつつ自己をそのなかに定位することがもはや困難になつたポストモダン空間のありよう(6)に対し、距離化をもたらず側面を有することになるのである。

繰り返し描かれる井之頭の〈彷徨〉は、読者に対し、彼の都市での〈流民〉的側面を印象付ける。この井之頭の〈流民〉的側面は、このテキストに彼の住家が一度も描かれてないことと照応している(第一五話に彼のオフィスは出てくるが)。このことを、空間の様態に目止し言い換えるなら、次のようになる。『孤独のグルメ』は、都市空間を井之頭の〈彷徨〉とともに、流動的な位相で繰り返し表象する反面、そこにおける井之頭にとつての安定した固定的な場(住家)の不在を暗示させる。このテキストは、〈食べる〉ことを描きつつ、〈場所〉から〈流れ〉へと変容したポストモダン都市における空

間(7)を〈地〉として織り込んでいるのである。

※

回帰すべき〈場所〉のない都会で、空腹を抱え、〈空虚〉を抱えた井之頭が〈彷徨〉しつつ、探しているのは字義通りの意味での〈レストラン〉かもしれない。即ち、失われた何かを取り戻し、回復する(restore)場としての――。

レベッカ・L・スパンングによれば、歴史的に初期のレストランは「個人を創出する装置」であり、「虚弱」な「個人」を「治療する場」であつた(8)とされ、ジャン・フランソワ・ルヴェルは「創成期のレストランは静かに心地よく落ち着けるのが特徴だつた」(9)とも言っている。そうした特徴を備えた初期のレストランこそ、「モノを食べる時はね 誰にも邪魔されず 自由で なんと いうか 救われてなきやあ ダメなんだ」「独りで静かで 豊かで……」(第一二話)と言う井之頭が食事をするに相応しい。「孤独のグルメ」という、ブリヤ・サヴァランを念頭に置くと撞着語法めいて響いてすらいいた言葉は、こうして、〈レストラン〉の原義に立ち返ることによつて、いささかの捻れを伴うことなく「孤独」と「グルメ」とを素材に結びつけるものとなる。たとえば、そのような〈レストラン〉が現代においてはファンタスムに

過ぎないにせよ。

「腹で食べる」のではなく「頭で食べる」時代だとは、既に紋切り型となつて久しい物言いである。今や「食べること」は、一部の人間にとつて原始的な営みである。ことを止め、もはやイメージや記号で幾重にも媒介された消費生活の一部分でしかない。同時に、「配合飼料型メニュー」(10)という表現にも示されているように、家庭での食事は栄養学的な充足を目指しながら、ますます瘦せ細つたものとなりつつある。こうした「食」をめぐる分裂した状況が、「癒し」を求める『孤独のグルメ』の読者が増え続ける背景にあるのかもしれない(11)。

註

- (1) 『恨ミシユラン』(『週刊朝日』一九九二年九月二五日号)一九九四年二月二二日号、休載あり)の発表時期は、九〇年代初期、「パブル経済」の破綻がジャーナリズムにも取り上げられ、それが「現実」として広く認識されてゆく過程に少し遅れつつ並行している。实体经济から遊離した「パブル経済」は、それが「パブル」として認識されたとき、既に崩壊し、存在していなかった。それを認識することが同時に既に消えてしまったその幻影に感わされることへの自覚でもあった。こうした認識上の、実在と不在の戯れを「ブーム」としての「グルメ」を対象に演じ続けたのが「恨ミシユラン」というテキストであった。
- (2) サヴァランの邦訳は、エルマン版のテキストを使用した「ロラン・バルト、〈味覚の生理学〉を読む 付・ブリーヤール

アラン抄』(松島征訳、みすず書房、一九八五)に拠る。

- (3) ロラン・バルト「ブリーヤールを読む」(前掲書所収)「必要／欲望」参照。
- (4) Elizabeth Wilson 'Looking backward, nostalgia and the city' In Westwood and Williams eds, 'Imagining Cities: Scripts, Signs, Memory' Routledge, 1997 参照。
- (5) M・フェザーストン「消費社会とポストモダンズム」下巻(小川葉子・川崎賢一編著訳、恒星社厚生閣、二〇〇三)「7都市文化とポストモダンのライフスタイル」参照。
- (6) Fredric Jameson 'Postmodernism, or, The Cultural Logic of Late Capitalism' Durham, NC Duke University Press 1991参照。
- (7) エマヌエル・カステル「都市・情報・グローバル経済 社会学の思想」(大沢善信訳、青木書店、一九九九)参照。
- (8) 『レストランの誕生 パリと現代グルメ文化』(小林正巳訳、青土社、二〇〇一)参照。
- (9) 『美食の文化史 ヨーロッパにおける味覚の変遷』(福永淑子・鈴木晶訳、筑摩書房、一九八九)二二頁。
- (10) 「配合飼料型メニュー」について、岩村暢子は次のように述べている。「素材自体の特性や、ミックスしたときの味のハーモニーなどは度外視して、食材を栄養・機能で記号化して捉え」、「栄養素発想で組み合わせられた多種多様な食材を、何とか料理らしい形に収めるために「化学調味料」がまるで触媒のように使用されている」(『変わる家族 変わる食卓 真実に破壊されるマーケティング常識』勁草書房、二〇〇三、一九六頁)。
- (11) 扶桑社文庫版では、二〇〇五年九月時点で第一〇刷に及んでいる。